

# 延慶本平家物語の地の文の展開

——接続詞の用法に注目して——

菅原 範夫

## 目次

はじめに

一、地の文に用いられる接続詞

二、章段の様態と接続詞の用例数の概観

三、接続詞使用の状況

1、少数使用の実態

2、多数使用の実態

おわりに

## はじめに

延慶本平家物語における接続詞の全体像<sup>(1)</sup>、及び使用の特性については、先に見たところである<sup>(2)</sup>。そこにおいては、接続詞の和文語的性格、漢文訓読語的性格の面から、それらが用いられている文章の種類との関係において考察を行った。接続詞の用いられている特徴も加味すると、延慶本平家物語の文章は、文書、地の文・由来説明文、地の文・普通文、緊張会話文、普通会話文の三種五類、及び和歌等に分類されることが分かり、それぞれにおいての接続詞の用いられ方

にも、ある均質なものが認められたのである。しかし、地の文・普通文（以下、単に「地の文」という）においては、接続詞の種類も多く、今一つ漠然とした感が拭えない。本稿は、地の文の中において、接続詞がどのように用いられているのかに絞って考察を加えていくことにする。

### 一、地の文に用いられる接続詞

地の文に用いられている接続詞の全体を見ると次のようである。（◆印は漢文訓読語、○印は和文語<sup>(3)</sup>。数字は用例数。）

- 累加 ○コレノミナラズ11 ○ソノウヘ7 ◆シカノミナラズ4 ◆シカモ4 ○ソレニ4 ◆カツウハ2 ◆カツウハマタ1 ○ソレノミナラズ1
- 並列 ○マタ115 ◆ナラヒニ28 ○マタハ6 ○モシハ1
- 選択 ◆アルイハ4 ◆アルイハマタ2 ◆ハタマタ2
- 転換 ◆ココニ21 ◆ソモソモ14 ◆ソレ2 ◆ココニモツテ1 ◆ソモ1
- 順接 ○サルホドニ88 ○サテ86 ○サレバ70 ○カカリケレバ27 ○カクテ27 ◆コレニヨツテ27 ○サテモ25
- サテコソ13 ◆スナハチ11 ◆ヨツテ10 ○サレバニヤ8 ○カカリシカバ6 ○サルママニハ6 ◆シカルアヒダ6 ○カカリシホドニ5 ◆ユエニ5 ○カカリケルアヒダ3 ◆シカレバ3 ○カカルホドニ2
- サテハ2 ○サラバ2 ○サアルホドニ2 ◆モツテ2 ◆イカントナレバ1 ○カカリケルトコロニ1
- カカリシアヒダ1 ○カカルアヒダ1 ○カカルトコロニ1 ○カクシテ1 ○カクスルホドニ1 ◆ココニモツテ1 ◆シカラズハ1 ◆シカラバ1 ◆シタガヒテ1
- 逆接 ○サレドモ51 ◆シカルニ22 ◆タダシ13 ○カカリケレドモ5 ◆シカリトイヘドモ5 ◆シカルヲ5
- ◆シカレドモ5 ○サレバトテ4 ○サリケレドモ3 ○サリトテ2 ○サハアレドモ1 ○サリトテハ1

○サリナガラモ 1 ○サレド 1  
 異なり語数は多いものの、用例数が二〇例を越えているものは少なく、次表の通りである。他の文章にどれほど用いられているかを併せて比較する。

地の文以外での使用状況を見合わせることによって、各接続詞の特性が見える。  
 まず、第一には「サルホドニ」「カカリケレバ」「カクテ」の類が注目される。これらは専ら地の文において用いられるものであり、文書類の漢文的表現と会話文の中には原則として共に用いられない特性を持つ。地の文を最も代表する接続詞であると言えよう。ここには拳がっていないが、他に「カカリシカバ」「カカリシホドニ」「カカリケルアヒダ」等「カカリ(ル)……」の語形のもは同様の特徴を持っているのである。

逆接	順接	転換	選択	並列	累加	地の文	文書	由来	緊・会	普・会
○サレドモ ◆シカルニ	○サルホドニ ○サテ ○サレバ ○カカリケレバ ○カクテ ◆コレニヨツテ ○サテモ	◆ココニ	(無し)	○マタ ◆ナラビニ	(無し)	二一 二八	二一 一八	八 二	七 九四	〇 一六
二五 二二	八八 八六 七〇 二七 二七 二七	二一		一一五 二八		三 〇	一 〇	一 五	二 三	〇 七
一 二八	〇 二〇 〇 〇 〇 〇	一		二 二		一 四	三 七	二 一	九 一	〇 八
一 一八	七 六 二 〇 〇 〇	七		七		一 六	七 六 二 〇 〇 〇	九 一	二 三	〇 七
〇 四	三 〇 一 〇 八 七 〇	〇		〇						

次には「ナラビニ」「ココニ」「コレニヨツテ」「シカルニ」の類である。いずれも漢文訓読語であり、しかも、漢文訓読語は全語が同じ傾向を見せる。地の文、文書の二種の文章の中での使用が中心となるもので、緊張会話文には用いられるが普通会話文には用いられないという特性を持つ。漢文訓読語的要素として文体の組成に重要な働き

をするものだが、用例数自体はさして多いものではない。

次に、「サテ」「サレバ」「サテモ」「サレドモ」の類がある。これらは地の文、緊張会話を中心として用いられ、普通会話文にも用いられるが、文書の中には原則として用いられていない。先の漢文訓読語の接続詞と逆の特徴を持つと言えよう。どの文章に用いられるかということでも分類すると、この三類に分けられる。順番に第一類、第二類、第三類と呼ぶことにする。漢文訓読語系、「サテ」「サリ」系、と語の成り立ちの共通性を持つものがそれぞれ一類となっており、ここに見られる分類はその意味においても共通性格の上に成り立っていることが察せられる。「カカリ(ル)」系と「サルホドニ」の類も地の文にのみ用いられるという点は共通性のあるものとして捉えてよいのであろう。他に「マタ」は、このいずれにも属さず、文章の類を問わず多用されているということになる。地の文での使用を考えるにあたって、右の三分類の上に立って特徴を捉える必要がある。

## 二、章段の形態と接続詞の用例数の概観

さて、延慶本平家物語は、左表の如く一二巻四四六章段で構成されている。

章段数	巻
40	一
40	二
34	三
38	四
40	五
33	六
37	七
37	八
32	九
35	一〇
39	一一
41	一二
446	計

物語の具体的な展開はこの章段中でなされ、接続詞は話題の発展等、物語の展開と深く関わっている。以下、章段を単位として考察を進めて行くことにする。次頁の表が、章段の形態と接続詞の用例数との関係をまとめたものである。

まず、章段は内容的に編年体のもとと紀伝体のもとがある。本稿では、各章段の書き出しが年月日で始まるものを編年体章段とし、それ以外のものを紀伝体章段とする。編年体章段の数は一七一章段で、全体の約三分の一である。章

合計	編年体								章段 行数	紀伝体								合計	
	接続詞あり(数)							無し		接続詞あり(数)							無し		
	1	2	3	4	5	6~	1			2	3	4	5	6~					
66	9	1	1					55	~10	9	3						21	33	
37	11	3	1				1	21	~20	27	7	1	2				33	70	
15	6	1	2	1	2			3	~30	13	6	3	2				8	32	
10	4	3	3						~40	10	9	3	2	1			11	36	
10	2	1	2			3		2	~50	5	4	3	1	3	2	5		23	
10	2	2	3	1			1	1	~60	6	3	3				1	2	15	
5	1	2		1			1		~70	3		3	1	2	1	2		12	
5		1		1	1			2	~80	1	1	1	1			3		7	
3		1		1	1				~90	2	5						1	1	9
									~100		4		1	1	2				8
9	2	1	2	1			2	1	101~	3	4	1	2	5	13	3			31
170	37	16	14	6	7	5		85	合計	79	46	18	12	11	24	86			276

段の大きさには大小様々のものがあるので、便宜的に行数(勉強社版翻字本による<sup>(4)</sup>)を基準にする。章段の大きさで見ると、編年体章段と紀伝体章段とに差異が見られる。編年体章段は、章段行数が一〇行以内、或は二〇行以内のものが一〇〇章段を越え、全体の六〇パーセントを占めている。概して小さな章段が多いということになる。これに対して紀伝体章段は右の如き小さな章段もあるが、平均的に様々な大きさの章段があり、一〇〇行を越えるものも少なくない。この違いが両者の量的側面での性格を表している。それでは、それぞれの章段にどのような接続詞が用いられているのであろうか。編年体章段では、表左上部に多くの章段が集中している。これらは、比較的小さな章段で、用いられている接続詞も少ないというものである。この位置に集中しているものをA群とする。加えて、接続詞を用いていない章段も小さな章段に集中しており、編年体章段の四〇パーセント以上を数える。これらをB群とする。このように表のある部分に近似した性格のものが集

章段 行数	編年(紀伝)体						
	接続詞あり(数)						無し
	1	2	3	4	5	6~	
~10							B
~20							群
~30	A	群					
~40							
~50					D		
~60							
~70							群
~80							
~90							
~100		C	群				
100~							

が極めて少ないという章段が少なからずあるということ、また、章段が大きいかつ接続詞も多いというものも少なからずある。前者をC群、後者をD群として、相互の位置関係を表示すると右上の表のようになる。このうち、A・B・D群のものは、右に述べた如く、文章量と接続詞数とが比例関係にあり、大筋においては自然なものである。紀伝体章段におけるC群のものが例外的ということになるうか。しかし、ある程度の章段が集中しており、これらは紀伝体章段の特徴のひとつであることに違いはない。

### 三、接続詞の使用状況

#### 1、少数使用の実態

では、具体的に接続詞が地の文においてどのように用いられているか見ることにする。

まず、接続詞の使用例が少ない章段についてその実態を見ると、A群、C群のものがそれに該当する。紀伝体章段、編年体章段それぞれにおいて、使用されている接続詞の用例数が三例以下の場合には、どのような接続詞がどれだけ用いられているか、第一節で取り出した用例数の多かった一二語を中心に見ると次の表の如くなる。各章段において地の

《紀伝体章段》

他	マタ	第三類				第二類				第一類			総用例数	章段内接続詞
		サレドモ	サレバ	サテモ	サテ	ナラビニ	シカルニ	コレニヨツテ	ココニ	カカリケレバ	カクテ	サルホドニ		
16	11	5	2	4	19	1	2	3	2	3	3	9	1	例
		30				7 (8)				15				
17	16	4	11	2	5	6	0	2	4	3	4	20	2	例
		22				6 (12)				27				
15	4	3	4	4	5	2	0	1	2	2	1	9	3	例
		16				3 (5)				12				

《編年体章段》

他	マタ	第三類				第二類				第一類			総用例数	章段内接続詞
		サレドモ	サレバ	サテモ	サテ	ナラビニ	シカルニ	コレニヨツテ	ココニ	カカリケレバ	カクテ	サルホドニ		
8	7	7	2	1	5	4	0	1	0	0	2	1	1	例
		15				1 (5)				3				
9	9	4	3	1	2	1	0	0	2	1	0	0	2	例
		10				2 (3)				1				
6	9	2	7	2	4	5	2	2	0	3	0	1	3	例
		15				4 (9)				4				

文の接続詞使用総数が一例の場合、紀伝体章段全体で「サルホドニ」は九例ある。一方、編年体章段全体では「サルホドニ」は一例しか用いられていない。使用接続詞の総数が複数の場合も、各語の延べ用例数を掲げた。一章段に「サルホドニ」が二回用いられている時には、「サルホドニ」用例数二として数えてある。第二類は、「ナラビニ」が他の三語と働きが異なるため、それを含めた合計は括弧に入れ、それを除いた合計数で考えることにする。また、紀伝体章段と編年体章段との章段数の違いによって用例数に多少がある。前者対後者での章段数は、章段内接続詞総用例数一例のもの二対一、二例のもの三対一、三例のもの一対一の比率である。この比率で見えた場合に、著しく両者の数値に違いがあるのは、一類のすべてと二類の章段内接続詞総用例数一例のものである。しかし、内訳を見ると、一類の「カクテ」「カカリケレバ」、二類の「ココニ」以下のものは違いと言っても用例数二と三例の違いでしかない。結局は「サルホドニ」の多寡の違いのみが著しい違いを生んでいるということになる。紀伝体章段に専ら用いられている「サルホドニ」がどのような働きとして用いられているか注目されるところである。

紀伝体章段の中には地の文の接続詞としては「サルホドニ」のみが用いられているものがある。一例のみのはさきで措き、二例のものでは次の四章段がそれである。

○三浦ノ人々ハ……案ノ如ク畠山二郎聞付テ……三浦ノ人々ハカクトモシラデ……トテ、ヤガテカケムトス。

サルホドニ兄ノ義盛小壺坂ニテ是ヲ見テ……サルホドニ、アブミズリニ引上テ、カイダテカヒテ待ツル三浦ノ別当義澄、已ニ合戦初ルト見テ……(五―14 小壺合戦事) (五―14は巻五第一四章を表す。以下同じ。)

○「敵只今ニ来ナムズ……」ト云ケレバ……衣笠城ニ籠ニケリ。……大介云ケルハ「……」ト云マ、ニ、鞭ヲアゲテ佐野平太ヲゾ打タリケル。猿程ニ日モクレヌ。「……」ト云ケレドモ、不叶。直垂モハガレニケリ。

サルホドニ夜モアケニケレバ……(五―15 衣笠城合戦事)

○頼盛ハ仲盛、光盛等引具テ……《抑頼盛ノトマリ給フ志ヲ尋レバ……俄ニ思留リケルトゾ聞ヘシ。(由来説明文)》



サルホドニ大臣殿盛次ヲ召テ……新中納言宣ヒケルハ……トテ、大臣殿ノ方ヲツラゲニ見ヤリ給ケルコソゲニト  
覚ヘテアワレナレ。サルホドニ権亮三位中将惟盛……兄弟五六人引具テ……関戸ノ院ノ程ニテ追付給ヘリ。……(七  
-26 頼盛道ヨリ返給事)

○次日ハ引田浦、…打過テ、屋嶋ノ城へ押寄タリ。…能登守殿ノ方へ被仰タリケルハ「…」トゾ有ケル。猿程ニ夜  
ノアケボノニ、塩干潰一ツヘダテ、…焼亡アリ。…(軍の記事あり)…皆涙ヲ流シテ「此殿ノ為ニハ命ヲ捨ル事不  
惜」トゾ各申合ケル。サルホドニ勝浦ニテ戦ツル源氏ノ軍兵共、ヲクレバセニ馳テ追付タリ。…(一一一八 八嶋二  
押寄合戦スル事)

右のうち、五<sub>15</sub>の二例、及び一一<sub>18</sub>の先の例は、「猿程ニ日モクレヌ」等、時間の大幅な経過の後の場面に話題を転じ  
る場合に用いられている。一一<sub>18</sub>の後の例も時間的な違いが大きいものである。また、五<sub>14</sub>、七<sub>26</sub>の後の例は、視  
点を据える人物を大きく移動する時に用いる。七<sub>26</sub>の後の例は由来説明文を終わり、元の話題に復す時に用いられている。  
多用されている場合を例にとつて見ると、その働きが顕著である。いずれも話題が大きく転換する時に用いられるとい  
う特徴がある。大きな話題転換を含むところに、また、それを「サルホドニ」で転換させるところに紀伝体章段特有の  
地の文の展開が見られるのである。その典型は章段が「サルホドニ」で始められるものである。使用例数一例のも  
は、九例中五例が、二例のもので四例がそれである。話題に重点を置いて章段を形成している紀伝体章段の特徴をよ  
く發揮しているものと言えよう。

さて、C群の中には一〇〇行を越える大きな章段でありながら地の文に接続詞がほとんど用いられていないものがある。  
それと同時に地の文に接続詞の全く用いられていない大きな章段もある。ここでそれらについて触れておきたい。

まず、接続詞が一例も地の文に用いられていない章段には「重盛父教訓之事」(二<sub>11</sub>)がある。「入道ハカヤウ二人々  
アマタ警メラカレタリケレドモ…」で始まるこの章段は、重盛が父に教訓する言葉を中心としている章段で、恰も眼前

で進行する態を描写している感のある、臨場感あふれる動的な描写の運びで構成されている。仮にこのような描写を眼前描写と呼ぶと、章段全体が眼前描写でなされており、会話文等が多く、また重要な働きをしている。地の文に接続詞は用いられずに展開される。編年体章段の中にも「成親卿出家事付彼北方備前へ使ヲ被遣事」(二一七)がある。成親卿と侍の信俊との面会の場面、北の方からの消息、子息基康との別れの場面、いずれも会話を含み愁嘆の様子を眼前描写したものである。両者に共通するのは章段全体が眼前描写でなされていることである。そこには地の文において先の話題と後の話題とをつなぐ必要はなく、接続詞が用いられることがないのである。つまり、語り手による前後の話題の關係説明が不要であるということに他ならない。ここから言えば、地の文における接続詞は、語り手が複数の話題の關係付けをするために用いる言葉であるということが明確になる。

この他、大きな章段で接続詞が一例しかないものも含めると、次の如く認められる。

### 《紀伝体章段》

#### ○「文学が道念之由緒事」(五一二)

(由緒ということ章段全体が構成されている。)

#### ○「白河院祈親持経ノ再誕ノ事」(六一五)

(匡房の論談と、それに続く「抑祈親持匡ト申ハ…」で始まる由來說明文が大部分を占める。)

#### ○「康頼油黄嶋ニ熊野ヲ祝奉事」(二一七)

(間に「サテ此ノ人々ノ住所ヨリ南ノ方ニ五十町ヲ去テ一ノ離山アリ」という一文をはきんで、前は康頼と俊寛とのこれまでの述懐、後は熊野詣の賛否が争われる。眼前描写。)

#### ○「義仲白山進願書事付兼平与盛俊合戦事」(七一〇)

(「サルホドニ安宅ノ勢軍ニ手負タリ」を間に置いて、前は願書、後は合戦の眼前描写。)

延慶本平家物語の地の文の展開

○「木曾送山門牒狀事付山門返牒事」(七一八)

(間に「カカリケレバ心々ノ僉議区々也ケレドモ…返牒ヲ送ル」を置いて、前に義仲の牒状、後に返牒がある。)

《編年体章段》

○「院ヨリ入道ノ許へ静憲法印被遣事」(三一二六)

(「サテモ法印帰参シテ…」を間に置いて、入道のくどき、法印の返答、帰りの様子を眼前描写。)

○「宮南都へ落給事付宇治ニテ合戦事」(四一八)

(「サテ兼綱ハ山ノ中へ引籠テ…」を間に置いて、宇治橋の合戦の個々人の活躍を眼前描写。)

これらは、眼前描写が中心になされる章段であると共に、由来説明文、文書、会話文等が全体、または多くの部分を占めている。いきおい地の文の比率が小さくなっていることも接続詞が少ないことの理由である。また、少ないこと理由においては、紀伝体章段と編年体章段との間に差は認められない。

## 2、多数使用の実態

一章段の中に接続詞が多数用いられているものを見ると、その用い方にいくつかの類別が見られる。まず、接続詞の述べ用例数は多いけれども、異なり語は少ないものがある。

○「清盛繁盛事」(一一四)

清盛嫡男タリシカバ：偏へニ執政ノ人ノ如シ。サレバ史記ノ月令ノ文ヲ引御シテ：。又年三十七ノ時、…ト見テ心モ武ク奢リハジメケリ。サレバ熊野ヨリ下向後：昇進ハ：猶速カナリ。カ、リシ程ニ、清盛：病ニ侵サレテ：肩ヲ並ル人無リケリ。サレバニヤ：「此一門ニ非ザル者ハ：人非人タルベシ」トゾ被申ケル。サレバイカナル人モ：ムスポホレントゾシケル。…代ニアマサレタルイタヅラ者ノカタブケ申事ハ常習也。而ニ此入道ノ世ザカリ

ノ間ハ：イルカセニ申者ナシ。：オソロシナド申モ愚也。サレバ眼ニ見：

○「燕丹之亡シ事」(四・36)

我朝ニモ不限恩ヲ不知者ノ滅ヒタル例ヲ尋ルニ昔唐国ニ：「サレドモ天道加護：サテ本国へ：」サテ荊軻：  
へ行向フ。：「猿程ニ秦國ノ將軍：」荊軻ヲ出シ立ツ。又、燕国ニ：「太子并賓客ノ：又、羽ノ音ニ遷ル時、  
：サテ荊軻車ニ乗テ：サレドモ蒼天免シ給ハネバ：サレバトテ空ク帰ルベキナラネバ：」サテ堂上ニ到リテ：  
サテ荊軻頭ヲ地ニ着ケテ：「又高漸離ハ：サレバ：宿望ヲ達セン事：

「清盛繁盛事」はさほど大きな章段ではないが、目録が示すごとく、清盛の栄華の様子を取り立てた章段である。清盛の威勢とそれによって引き起こされる事態とが「サレバ」によって結ばれ、その繰り返して世間への影響が少なからぬものであったことを印象付ける表現としている。「燕丹之亡シ事」は恩を知らぬ者の例として引いた説話である。これは「サテ」が繰り返して用いられて、次々に展開していく話を支えている。表現としては単調であるが、章段の性格はよく強調されるものとなっている。前後の文の関係を示すもので、ここで多用される接続詞は第三種に属しており、地の文に多用されることの一端が窺われる。同様に特定の語が使われているものに次の様なものもある。

○「住吉大明神事付神宮皇后事」(二・13)

三月十九日：色々幣帛并二種々神宝ヲ：一神ハ摂津国住吉ニ留給フ。即住吉大明神ト申ス。：即諏方大明神ト申ス。：渡セ給トカヤ。サレバ昔ノ征伐ノ事ヲ忘レ給ハズ。：今ノ八幡大菩薩ト申スハ即是也。

○法皇小原へ御幸成ル事(二・25)(卍行)

サアル程ニ文治二年ニモ成ヌ。：「彼寺ニ詣テ礼セ給フニ：、又浄ルリノ有様ヲ書タルトオボシクテ、：「彼寺ノ有様：即寂光院是也。：「サテ内ノ有様ヲ御覽ズレバ：并ニ：并ニ：ヲ置レタリ。又御勤ノ隙ノ：又参川守守基法師ガ：詠ジケル：又浄土ノ法文トオボシクテ：「サテ仏ノ御傍ノ障子ヲ引アケテ：

説明を多く含むものと、後者は視線の動きにしたがつて部屋の様子を並べて行くものである。「マタ」の頻用に特徴が見られる。

それらとは逆に、異なり語数が多いものも一類をなしている。

○「主上々皇御不快之事付二代ノ后ニ立事」(一七八)

鳥羽院御晏駕ノ後ハ：内ヨリ御誠アリ。カ、リシカバ：高モ賤モ恐レ怖キテ：其故ハ内ノ近従者：ガ計ニテ：被流ニケリ。猿程ニ又主上ヲ呪咀シ奉ル由聞ヘ有テ、：又時忠卿：恨奉セケル時、：又法皇多年御宿願ニテ：「異朝ノ先蹤ヲ尋ヌレバ：爰ニ帝：臨幸アツテ：爰ニ扈從ノ群公等：都ニ入奉リ、：爰ニ臣下嘆テ云ク「：」ト。例在位廿一年ニシテ。：又：ト称ス。即、：ニ当レリ。』：加様ノ思ノ外ノ事共多カリキ。カ、ル程ニ、永満元年ノ春ノ比ヨリ：ヨハラセ給ニキ。是ニ依テ、：ガ娘ノ腹ニ：王子御坐シヲ皇太子ニ立セ給ベキ由：

○「頼朝与隆義合戦事」(六一二五)

四月廿日兵衛佐頼朝ヲ可奉誅之由：申下タル：依之、隆義：逃籠ニケリ。：平家ノ運尽ヌル事顯レタリ。然バ年来恩願ノ輩ノ外走付者更ニナシ。猿程ニ去年：西取ノ業如シ無カ。カ、リケレバ天下飢饉シテ多ク及餓死ニ。カクテ今年モ暮ニキ。：死人如砂。サレバ事宜キサマシタル人々：算ノ乱タルガ如シ。サレバ車ナムドモ直ニ不通：

これらは章段の内容が多岐に亙り、かつ表現も多様なものであることが知られる。編年体章段の「頼朝与隆義合戦事」は小さな章段であるが、単に合戦のみではなく、その年の飢饉の内容等も合わせている。章段数としてはこの類が最も多く、紀伝体章段、編年体章段ともに複数の章段がある。右の二章段に見られる「カクテ」「カカリケレバ」「ナラビニ」「ココニ」「コレニヨツテ」等、地の文全体で二〇〜三〇例を教え、使用例数が中程度であった一群の接続詞はここに集中している。地の文に特有のもの、漢文訓読語が中心をなしており、章段も多いことから、典型的な地の文の一つとさ

れよう。類別としては、第一類、第二類のものが多い。

地の文にのみ用いられる接続詞としては「サルホドニ」があり、少数使用での特徴も先に見たところであるが、多数使用の場合にもこれを中心としている章段がある。

○「源氏三草山并一谷追落事」(九二〇)(362行)

猿程ニ源氏二手ニ構テ：カ、リケレバ兵衛佐「：」：「サルホドニ五日モクレニケリ。：」：「カ、リケル所ニ  
年五十許ナル男：『サルホドニ夜モホノボト明ケレバ：』サテコソ：被成ニケレ。：『サルホドニ西ノ渚ヨ  
リ：』：コ、ニ別府小太郎ス、ミイデ、：

○「義王義女之事」(二一七)(140行)

其比都ニ白拍子二人アリ。：其上：。『其比又都ニ：サテ申ケルハ：』猿程ニハカナキ世ノナラヒニテ：『サテ  
里ニ帰リテ：』猿程ニ入道ハ：サレバ次第二衰ヘケリ。：『猿程ニ年モ已ニ暮ヌ。：』：参リケル。：サテ内ニ  
入タレバ：サレドモ入道ハ：『サテ其後：サリトテ年モ僅ニ廿ノウチ：サテ入道殿ハ：

前者は最も大きな章段の一つであつて、接続詞の使用頻度もさして高いものではない。しかしながら、段落の始めは「サルホドニ」が一定している。後者も同様であるが、「サルホドニ」の中に「サテ」が置かれ、説話的側面を見せているところに特徴がある。

先に「サレバ」「サテ」を中心にも用するものを見たが、それにこの「サルホドニ」を加えた三語が地の文において最も多用される接続詞である。これらによる地の文の展開は基本的なものとして存在していると考えられる。

おわりに

時間的に場面を変更するなど話題の大きな転換に用いられる「サルホドニ」は、それ故に地の文に専ら用いられるも

のと考えられる。更に、前節で見た章段内の接続詞の多寡両面において、「サルホドニ」がいずれにも用いられているも、そのような働きに基づくと考えられる。それは語の組成そのものに発する所でもある。他の「サテ」「サレバ」等、順接、逆接の語は、これと異なり、ひとつの小さな話題が直接的に展開することの表現に用いられるものであり、働きが異なるものである。さすれば、先に第一類としたものも、「サルホドニ」と「カクテ」「カカリケレバ」とは地の文に専用という共通点はあるものの、その理由としては異なるものであることを考慮しなくてはならない。「カカリ(ル)…」形の接続詞については、『太平記』の「カカルトコロニ」が指摘されているように、別に考察を加える必要がある。

さて、個別には未詳の部分を含んでいるが、「サテ」「サレバ」の多用される例を見た如く、延慶本平家物語では接続詞を多く用いて前後の文を詳しく関係付けていると言つてよいと考えられる。前節2で引用した例文において見られるように細かに意を用いて展開の様を表現していると言えるのである。そのことが接続詞の多用さを生んでいると考えられる。その意の用い方は、前稿で述べた各文章の特性がそれぞれ頭著であったこととも関係がある。別の観点から、会話文にしか用いられない言葉が注目されているが、それとの関係も深いものがあると考えられるのである。

## 注

- (1) 本稿では、青木倫子氏作成の「接続詞および接続詞的語彙一覧」(『品詞別日本文法講座』六)にならない、接続詞的に働く語句を含めて考える。
- (2) 拙稿「延慶本平家物語の接続詞」(『鎌倉時代語研究』第十六輯 平五・5)
- (3) 漢文訓読語の認定は、築島裕『平安時代の漢文訓読語につきての研究』(東京大学出版会 一九六三・3)、峰岸明『平安時代古記録の国語学的研究』(東京大学出版会 一九八六・2)や、接続詞についての文献での指摘に基づく。その他は推定による。
- (4) 北原保雄・小川栄一編 勉誠社 平二・6)
- (5) 下河部行輝『『太平記』の文体——「かかるところに」——』(『国語学研究』8 一九六八・8)
- (6) 注(2)文献
- (7) 小林芳規「鎌倉時代の口頭語について」(『鎌倉時代語研究』第十一輯 昭六三・8)